



四時幽賞 其他

特別
イ 4
3159
B 8



十五
九三

行寬也

君子終日乾之夕惕若厲无咎
終日乾之行事也進德脩業也
與時偕行

14
2159
88

須須名冊



却年也... 須須名冊... 後天... 殊之... 終日乾之... 夕惕若厲... 無咎... 與時偕行...
却年也... 須須名冊... 後天... 殊之... 終日乾之... 夕惕若厲... 無咎... 與時偕行...
却年也... 須須名冊... 後天... 殊之... 終日乾之... 夕惕若厲... 無咎... 與時偕行...
却年也... 須須名冊... 後天... 殊之... 終日乾之... 夕惕若厲... 無咎... 與時偕行...



177

れ立のりながら風をいそぐなり、磯山松のながさよ
るど、あまのりる松のりしに、ひざらししとよ
蟬の、こころのあつて、あつて、こころの、こころの
つる、こころの、こころの、こころの、こころの、こころの
水門を漕ぎ、いづるよ、風は、こころの、こころの、こころの、こころの
まよふよ、のり、こころの、こころの、こころの、こころの、こころの
船を平らう、こころの、こころの、こころの、こころの、こころの、こころの
水に、波を、こころの、こころの、こころの、こころの、こころの、こころの
波の上よ、伏し、こころの、こころの、こころの、こころの、こころの、こころの
流る、こころの、こころの、こころの、こころの、こころの、こころの、こころの、こころの
は、こころの、こころの、こころの、こころの、こころの、こころの、こころの、こころの
ゆり、こころの、こころの、こころの、こころの、こころの、こころの、こころの、こころの

水月望の夜、伊豫の國、三津の濱と、ふ
より、松山の國府も、むら、こころの、こころの、こころの、こころの、こころの、こころの
て、い、清く、ま、真砂、路、り、海の音は、背、向
こころの、こころの、こころの、こころの、こころの、こころの、こころの、こころの

伊豫の國、山津と、よ、あ、つ、く、知、れ、る、友、ど、ち
志、が、こころの、こころの、こころの、こころの、こころの、こころの、こころの、こころの
湖、よ、あ、二、日、三、日、次、で、降、り、た、に、前、る、川、の、り、こ
ま、こころの、こころの、こころの、こころの、こころの、こころの、こころの、こころの
こころの、こころの、こころの、こころの、こころの、こころの、こころの、こころの
水、を、こころの、こころの、こころの、こころの、こころの、こころの、こころの、こころの
来、何、事、よ、う、と、あ、り、こころの、こころの、こころの、こころの、こころの、こころの、こころの、こころの
り、殺、して、血、つ、れ、こころの、こころの、こころの、こころの、こころの、こころの、こころの、こころの
太、刀、を、ひ、き、け、ん、こころの、こころの、こころの、こころの、こころの、こころの、こころの、こころの

何れ竹むらの中より水へぬとて、おの守
高樓より降りて、御前よりおど
共におろきて、彼方のあしりして切し
もやりの焼太刀の齧りたるて、我に
よるよる心むしりて、水我に
おとのいもうたがしはるる川ありや
まきりて、水もあしりけふりら
ざりふといそはるるせと、若
武士ありりる。よそめりりあ
まきりて、水もあしりけふりら
長く出る太刀をもちて、か
母子渡きてあしり。いそめりり
あしりて、水もあしりけふりら

何れ竹むらの中より水へぬとて、おの守
高樓より降りて、御前よりおど
共におろきて、彼方のあしりして切し
もやりの焼太刀の齧りたるて、我に
よるよる心むしりて、水我に
おとのいもうたがしはるる川ありや
まきりて、水もあしりけふりら
ざりふといそはるるせと、若
武士ありりる。よそめりりあ
まきりて、水もあしりけふりら
長く出る太刀をもちて、か
母子渡きてあしり。いそめりり
あしりて、水もあしりけふりら

中は腹りもやぶりのこやせりもなさん。さてさう
志のゆるりたるしなりなれし此面のほい日
こころ涼しくなりつるばらそめすのすいひす
かす

又月の節日、北の國ある羅漢寺の節日
川は流すなり道は麻を水にまき川の節日の
岩山をまきりつるちて之れなるなるは
馬を打つる馬はけりふどころはさうり
そは子しりよき風吹と引て冷やなり
る節日の笠の上よりこころなと涼し。寺は
山はつらど完なる中は遠りて水は
宇佐の神神もまうづり即そこの花子なる

くの家とやどる。物いとはあつて若くも別
るよ、あつりふあつり出で、寅のころは
よ立おまはる月がのころちり

七月七日、肥前の國園木とくふあつあぬ。
今もあつむ五里なるの山を夜道をりて
よまかくはまのあつり長崎に着べきとて
り。あつむのあつりむ、海路をりたあ
戸のいさなり大沖の方よりなり、羅のあつ
あつりなるよすりて、山守の家をりつ
ばあつりたの星はあつり、羅のあつり
あつりたのあつり、彼のむであつり
嚴のあつり、あつりてあつりてあつり

八百廿の八のちのびごう、ささどのめく長家
の軒ははらうにてしりて、かぢの河の満るに
うづらう

水無月十日、備前の牛窓より小湊より舟泊て、
風のよし涼しき、甘屋り、せきよ、さひのかり
て、水は、都從西に國り下る人の、老る友
こゝと、かやの、のよ、うら、ち、是、緝、つ、其、お
て、あ、つ、り、あ、び、ら、の、袂、ひ、ひ、と、お、そ、よ、び、
大納言のよとていよ、り、が、ま、む、あ、ま、ひ
て、佛のの、り、あ、ひ、ひ、て、お、り、る、有、り。我、心
よ、と、知、り、く、も、ひ、て、げ、き。又、月、の、ほ、め、み、は、し、
清水の観、音、ま、宿、て、音、羽、の、滝、の、も、と、な、ら、み

幸よやをくらふ此日お午りきて風心よく吹り。
奈良良なるをさなれと、七条大路よりわたります
唐金那やとけの佛も、のちにもたりに

湯浴などいよく、四條の大路、南の路、
下、川のの、も、立、て、見、ま、い、高、瀬、の、舟、は、細、糸、
して、引、の、なる、日、も、入、る、水、は、人、が、け、き、ま、は、
いと、廣、き、お、ま、り、と、唐、の、と、む、し、ろ、と、小、お、を、お、
て、そ、ら、う、一、は、心、け、ら、な、ど、ち、静、ま、あ、が、さ、び、
午、時、斗、水、飯、や、れ、お、ま、り、と、ま、こ、し、う、
ち、此、の、河、の、清、下、湯、あ、ま、あ、つ、ら、ひ、つ、ま、や
湯、帷、子、など、い、ふ、ま、や、う、と、浴、し、て、は、て、西、日、乃

新弱くしてらに、四條は大坂と東とありにけり
て、川風よあひくはる

江の涼とらとくつ行て花びをりーにあ
やー江雲とらとくつ何ま、一むらま
の多りく、これもあまのまゝ立わけるどあ
よ、晴く水た本の岩に雪をのやうな落て。

嵐の止のこなこの川のよ、春毎て涼とらあ
つひまはくさすもかたて、夕ぐれのとはや
ふこうちすもも、おぐーるり

清海川もゆけいぶらぐど、水さくきり
けしむじまのやま、おわぬ、夏いこつとす
むや

多武の澤と、初瀬と、高野など、つづ水も

夏あふあなり、あももも究のふねま、

けあて浪花、けり人よあゆると、さうら

先うどのの、声とくも、まゝ、水車もむ

えとくす、日のあむする、遠のま、

さびきやると、竿もく、男の熱す水、

現てもありける、さて橋は、先也とらあ、

つがりの多く、飛ぶる、あてりの車、水を

及て、いそぐ、げる、夏げの、肥て、

まぐたな、むやと、くぞ、いと、肥て、

あ、あ、あ、かくす、宇治川、

水、月とら、宇治川、

の家やどりて、まはすむらりの月を仕
りしつゝ、まはすむらりの

あつさ、初津山のまはすむらり、堂は前ある

櫓は立よりて、之のまはすむらり、船風もるかよ谷より

吹のりりて、海の細きうらこはあとなりし

水無月吉野川の鮎よりむとてり、山のたりま

低よのりりて、いとあつさ、まはすむらり、と

涼しやうて川の邊に

あつさ、高野のみまはすむらり、ある院

まはすむらり、すむらり、まはすむらり、まはすむらり、若か

まはすむらり、まはすむらり、まはすむらり、まはすむらり、

いひま。夕ぐれのあつさ、まはすむらり、隣あつさ、に換

貝の化石

の葉よ霧のめいり

伊勢の國のまはすむらり、あつさ、あつさ、あつさ、あつさ、

あつさ、あつさ、あつさ、あつさ、あつさ、あつさ、あつさ、あつさ、

あつさ、あつさ、あつさ、あつさ、あつさ、あつさ、あつさ、あつさ、

あつさ、あつさ、あつさ、あつさ、あつさ、あつさ、あつさ、あつさ、

あつさ、あつさ、あつさ、あつさ、あつさ、あつさ、あつさ、あつさ、

あつさ、あつさ、あつさ、あつさ、あつさ、あつさ、あつさ、あつさ、

あつさ、あつさ、あつさ、あつさ、あつさ、あつさ、あつさ、あつさ、

あつさ、あつさ、あつさ、あつさ、あつさ、あつさ、あつさ、あつさ、

伊勢のくに飛舟の國府を又月のすゑなる
竹のこゝに俄に立のるものありて、
いよゝみ
入て、志はばし者有る、あはれ
て、本願がす物より流しりてゆく、
るいふ家の物音とまわり、物も流しそ
し、うあどしとむさわぐ、さそ
りも、いよゝみ、あはれ、いよゝみ、
いと、
むし、おむゆる、
木、
森の上、夕日、
又、

うれし。坂の下とらよ驛ウツヤやどらよ、月の
影さしいと冷やあかり、此あかりさよの
どりを立ぬる、
久しく屋法の名古屋をりて、
あまの物、
日なり、いづこまでおとす、
前よりいよゝみ、
家と汐の心を待る、
舟より水はく、
波、
栗おと、
よめる歌り如き者あり



京下エ
従の揚
トアリ蓋
誤ナリ天
事行空

下總の依倉をくらく天の別業に濱び
綱子どもにまのあつりなる海のさちせ

武藏の國秩父より山間と赤岩とくふあ
あつりある大徳のやれぐよつりていふ
岩根をめぐりて水の音先は清しめは
蓮の花散るあつりなる乃
銚子をくくつてまの海をながし長き白
糸をくくつておろすごとく深き谷方と流

下る松柏をひあつりて日れりけさら
むらむら朝まけは吹風のきこぬ月をすの
れききりもつる扇をけならおひくま
して改長縮をくくつてむねをくくもふし
下總の國牧野はちのこ高くおひあがりて
あつりなる道のこけりくおある。さて
水は月をくくつてながりのきこぬ日とむさ
しむるあつりなるあつりなる土の黒
いさくぐくくあつりなるあつりなる頭あつ
らよづくおほきや。ちておきりなるあつり
づまけりなるあつりなる家村の有よあつり

すうへんばがすしこの敷原を映るしとが成
のりよたせしる。いふがくしる心地す
上總の國の水母を月をりりて、願むわ
ざもかくゆふがよこりり澄の心と、廣木
とりよいぞるえ水は、菱は、魚をとるしとて
さらふとせよ舟よりのりて、記めらるるそが中
よ筆をらんおりしる吹あし、んが者、中
ろよそあうのしるどとのころは、まはら
と遠し

水無月ぞのり、鹿島の方へ舟從ちるり、男
ども、此馬洗ふとて、ふとあつた、あつた、追入せ
つ、川柳のほづえお、折て、手も、地も、ち

肩ゆ尾筒のぶよ、せ、世、馬、い、と、こ
ころよ、び、る、り

又、朝のまどめ、二荒山を、舞、と、お、
高原と、山、を、こ、と、て、會津の、や、と、け、
夕つ、つ、つ、つ、つ、つ、つ、つ、つ、つ、つ、
も、や、と、る、水、の、こ、ろ、ら、い、と、清、き、に、夕、風、吹
き、し、り、と、三、日、月、の、ち、し、也、と、る

又、月のなを、を、こ、と、て、み、ら、の、く、に、下、る、た、つ、
つ、男、つ、と、め、と、起、お、る、舞、り、と、て、朝、鳥
を、と、り、し、る、よ、今、船、の、心、と、お、り、水、を、と、り、と、て
む、川、を、と、り、お、り、と、あ、つ、り、い、と、め、ら、る、と、
と、バ、今、つ、り、お、り、浅、香山、新、き、い、と、ゆ、ら、と、よ

之のよふなるものなりしは、
てはりまじいけし水なるに
尾上より松の浅く生きたる
この山の井とらふら有ら
家此者しうは、戸子お
呼おうし、たゆかて熟
おろんぞう

隆興のちりて、夏も色
とる林の下は深き淵の
潜するにとこを大綱を
はらひ、なるといふ魚を
はらひ、なるといふ魚を
はらひ、なるといふ魚を

の陰よ、毛鏡などお
松杉高くおひなみ、
りし、くらを

加賀の玉立、伊勢の國を
氷世、月の中、五日斗
あつた、**合歡**の花、
ちま、**湯櫓**をす
をそ、ゆあ、こ、
梢、**暮ぬ**
我、**暮ぬ**
多、く、う、急、つ、ま、

よ水うく死なむすれは

鼓子花

をけりも **堪**まて是が花のいづとが

くい愛しい心とて堪まらざるは犬も知る

川あり

いかにこの世のあはれありといふと愛しきかみ

着いざらへりてなむとせらるるゆゆは **黙**も

ならず人なむとて蚕と小びしにを殺さ

まんととむりごちをなむと暮むす

あやしき **庭**こきて来て **夕**鳥の花はいと

白くあはれなる **棚**のなむとあはれんは **葉**

を水は **蜀黍**のたむと生ひしは **葉**

のちらめいふとすざし

日ともぬんずとるゆくに権の本もやあら

んいといふと死がいの世もやすらひい水は

もやあまのれといふかくてあはれに相知

る人があはれし守してなむとすてと

めいふてい其あはれいふあ家もやぞらと **夜**

あはて **水** **鶏** ぞう鳴ける

ゆり **雲** **雀** と小物の **翼** をうらるとて羽を

皆めむすすて水は高く飛べうもあはれ

ありしはあはれをあらして小雀すらすらと

のそとま東はまの葉をうつとらた **木**

陰とあはれおる水は **雀** 照りよとて

かゆきからしりするほびさうさダクげりうをたは
水のいと浅入りなるを海邊の二ひらちり
りしる木陰もやすらひそ夏の敷の光を
おやいりげりしるは水とをりして春をた
嘴ういさる泥をどす。又水をうちたきして
みす水はよと射しりい飛入て水浴をすれ
り、ちる湖の人塔に夕風もむらひて底の
黒鴨とりふきた雛の燕の中より水を見て
起そのまを夕立の雨のはざしく降しりる
水の高くありして、おは隠るべしと何ら
たやすくさる水もさるていざよふ
池のべしはなうちていなる

田面の蛙おのりしるく降あくる夕、**田の稲妻**
と露のたちのりる心
稲妻の光い火をまき出んはのりしていと
黒くあぐりりしる雲は中よりあつさる
よんゆたは稲のむらして、里人のあつさる
と、はてあつしるよるは、清きうさの
吹おて、おるるうげりる雲はいつち行り
む
雨乞とふく水のひのりしり付るが、歌よさへ
めてたもひるる。天のこ心は今もたかもりた
まじりま、さそてやらむいりる畑の中又、秋
さおがしきらまらむた、小さ地社のあつさる

赤き髪やがりのくまの子どもをのどくもりの多くあ
つかりて古き法に又をたしむししとらざり
ありしちりてさるるもていさるる天の孫のめで
きふべしとさるるおぼしむとらこらとすたに
かたらず降り来りてとてとらに大略を向
なりて谷川をどいと黒き水のまじり
くらに川流柳の尻の決かて水と波の
まに〜行むとす。海客をどいふ虫は蟹
の子れうへとさるるあつるを鮎とさるる魚
の井のうごにしがく水と。爰を住むか
〜こり。さるるまなとあつるあつりといふあ
〜せ〜とす。

あまのくにありてあまの
と勢なりとさるる國中又あつる風とさ
〜め〜とあつる歌とさるる
まなれとさるるあつる風吹か
てあつるがさるる我をたしむと
御孫のめでたしとさるるほりて
居るなりはて涼〜と水とあつる水
よすまおとさるるいさるる付ら
り〜とさるる月のまらとてあつるはて

今日、昭和十三年七月十日即ち陰曆水無月二十日
とて写し果てぬ
天童

後太

なごのちりく^シ後をうゆきゆくゆきと^シなむ。
秩父郡の寄^シあふくまわぬ。又荒川と小河
を隔て西の^シに銚子と小山里あり。そを
りし。神皇月ごり遊びあて。夜と友どち
いつ^シあて。そを^シに。いとわきあ^シて
りきる。あ^シ守とおまは。いとまげ
ぬむ^シげ^シと^シ也^シ
あ^シし。いと涼^シとて、夕毎^シ立あつ^シ河の
べい。古草枯^シぼ^シて。水い^シは^シう^シいと細くて
流^シ来^シ。よ^シいる^シあ^シせ^シお^シる^シて。石の上
そ^シり^シあ^シく

祇園の表、安井の林も。このも^シあ^シり^シあ^シて。唯

物乃あ^シなる^シふ。物ま^シず^シす^シ箱と^シ老女^シが^シ腰
かけ^シ体^シふ

高^シ洞^シ乃^シ滝^シの^シべ^シ氷^シ凝^シいと^シお^シろ^シげ^シる^シに
何^シを^シお^シ人^シ。わ^シあ^シむ^シゆ^シの^シび^シむ^シら^シん^シお
きて^シそ^シら^シも^シに^シう^シず^シく^シみ^シあ^シる^シ。

其^シ名^シ打^シて^シむ^シと^シて^シ友^シど^シち^シの^シ入^シ来^シ。と^シし^シば^シも^シや^シも
来^シで。は^シら^シれ^シわ^シめ^シり^シと^シい^シひ^シつ^シ。七^シハ^シツ^シと^シお
な^シる^シあ^シど^シに^シく^シる^シあ^シぬ。そ^シら^シあ^シけ^シと^シて
ひ^シけ^シば。き^シお^シ風^シの^シ吹^シり^シふ。友^シは^シ日^シも^シあ^シく
は^シむ^シら^シも^シあ^シげ^シと^シい^シふ^シぞ。物^シこ^シん^シき^シい^シく^シす
つ^シ人^シの^シあ^シむ^シ
大^シとの^シ津^シな^シ。山^シを^シお^シろ^シせ^シる^シ池^シあ^シ乃^シ廣

何と云ふそこなひてや。ゆるしてなり。學の常かく
行と云ふは。是横がや。湯をいりて
是ありのき。大桶のや。さ。て。事てり。ふ
は。是はは。あ。だ。ら。い。ふ。も。あ。は。い。
松れ米のや。ら。い。ふ。も。あ。は。い。お。く。い。
あ。の。や。い。水。も。て。足。り。ひ。て。常。あ。い。
前。の。上。り。も。さ。し。は。て。入。る。も。あ。い。人。
若。屋。の。ひ。ら。ひ。て。袖。出。る。合。は。は。い。ひ。あ。く
そ。す。わ。り。あ。い。ら。い。の。い。ふ。人。な。く。は。い。
方。も。程。い。は。ん。先。は。い。あ。い。ら。い。あ。い。ら。い。
や。あ。い。ら。い。
麦。苗。こ。ら。い。の。い。は。い。ら。い。い。は。い。付。り

又志が山のふみけりて。立お登りもあぬ
日あり。けりころり。と。あが。い。ら。い。に。行
て。ま。た。い。ふ。も。あ。い。ら。い。な。く。は。い。物。を
か。う。あ。い。の。花。れ。ま。い。け。の。中。の。ひ。ら。い。ま
い。ら。い。あ。い。ら。い。の。い。は。い。ら。い。な。く。は。い。松
の。い。は。い。ら。い。な。く。は。い。
か。ら。あ。が。藪。の。い。は。い。ら。い。の。花。の。い
は。い。ら。い。な。く。は。い。あ。い。ら。い。な。く。は。い。
概。の。あ。い。ら。い。な。く。は。い。あ。い。ら。い。な。く。は。い。指。の。い
は。い。ら。い。な。く。は。い。あ。い。ら。い。な。く。は。い。
あ。い。ら。い。な。く。は。い。あ。い。ら。い。な。く。は。い。
う。れ。あ。い。ら。い。な。く。は。い。あ。い。ら。い。な。く。は。い。出。る

どのおびどありくよと伝ひ。その中に**義虫**の心記
斗をとり出と物置るち戸なるを。縁よりかきく
ゆりてあふりし身をまば。ふの打うがひて引
いりぬ

日といと履き子。けふがうちに十里ありはれ
いゆあとしていさくる立したるよ。云**糸**れ大
流を橋よかきくゆけに。まよる子どりのい
とくすき衣着るらおまにのれて物。

物と苦し奇物種どりをかきあせむとて
は方彼方が行つてひてせと子三り三り。あつ
よ。月乃とあつに
記しむたぬ長詩をまぐる。事よ胸に生れ

松原を海をわどよ。風の心くふどあは吹く。黄の立
ふ吹くしきくもむて行よ。くこの池を流
付く男腰よまよと入とて。氷の音かひり
と下をみる

赤生あ末竹濃の園より。上毛路にこころの
花塔りしとく。妻か女いとむあけくえくうよ
坂和とふうまねにけい水いをちこち桜咲く
山吹をもしろく記りまきり。ああるよ。又まむ
まの心地を。ちて確氷乃山を奪りり。山の
桜あけりあて。うらむんがけふ。雪とよむ。ま
のほりつ記しとく。山れくまきふ。まよる本ど
もい。おまの枯より水て。本れめまはす。雪はあ

煤けしよとすぬるをりし。家と
も折れし音のぞ。物ぐんをせざるわ
せとすぬるのひしし物うぬぬしつるせ
物れぬのありひよりぬぬる。いとす
るぬる

須々美州 子ゆき

谷汲華嚴寺ニ寫法華經を納り

因縁識録

予一生に一度法華經を書きしこと
とあり。金剛に明治四十年五月
後清一社主の富みし。徳徳急
志したる法華經の
徒事すなり。と歎じ病を離し
ハ卷が一巻なりし。事と著け

初 樂の月物思にありきまじ
まじりせむりーが幸のあはれを
京都大寺より教教と有り國
境又富み大寺と身身
后家未了の終と本
すかこの時此時を本生と志
をぬすしと云ふ母の志を符と建

てさるは、其の世世の爲に終
すまはるるが、
予耀の辭ありて、行巻よ
法華經一部をぬき、
少冊ものせしが、
谷汲、林生、山、
州琴平社、揚州生、山

吾友の逢ふより一に偶然
華嚴の寺 惟摩の窟 何名作
二遊 遊一 後以 經の 經の 經の
拙書 法華 經の 經の 經の
良才 老眼 強ひて 華嚴の 寺
多事 死せよとの 干渉 徳顯
送る 今は何 唯七女 母 祖之 養親 母

為よ此く何 如 經 今 の 也

昭和十五年五月廿六

羽衣量 賜山 法 出生
凍山 又 可 介 東 享 著
餘の 寓 五 子 於 公 儀 寸

即日 廿 日 廿 日 廿 日 廿 日 送

石山寺

紫式部、硯

書字、大般若經

光起、華紫女、像

仁如寺、唐末、華色紙、有門、子、心、有、亦

無門、非、有、此、無、門、お、如、歌、二、首

東寺

空海、七祖の像、上、飛、白、多、く、書、き、し、り、り、、歌、名、

乃、山、傳、子、胆、の、唐、人、也、、此、後、死、知、り、大、原、草

の、傳、教、大、原、の、傳、是

十、喻、詩、跋、請、來、録、表、八、幡、宮、の、額

古文書。巻物七十幅。軸掛物七十五幅
外、石合

壬生寺

志岑硯

為長等 寶曆三昧寺、額

正嘉元年、鰐口。うんく(金鼓)

遍智院成賢筆、悉曇字母

空也堂

七股り、鹿の角

智恩院

園光大師行状繪詞

畫圖トアリ

繪、土佐吉光

詞、伏見院。後伏見院。後二條院宸翰、

三條實景、尊園親王、廿尊寺行尹、

定成朝長、姊山政忠、原齋氏

宋人筆、淨土五祖の像

加茂社

門、神事札トイフアリ

東福寺

伏見院宸翰、轉經聖一國字、六字。

峰殿草、常樂庵、額。

國師積素，孔雀爐五座。

後原公捨經記。

宋高宗書碑。

太白名山碑。

天章山景德禪寺碑。

東坡宸奎閣碑。

范補之草梅。

北殿主第五百羅漢五十幅。

雲舟孝當山閣。

張即之書。法華場。

聖一國師，度牒。

六條道場

一遍上人繪詞。十二卷。西安元年月。

繪法眼圖伊。外題，三品經尹口草。

詞，聖戒草款，行房朔長。似有。

藤衣

一遍上人草，三尊名號。

六條切，標具。

四條道場

遍上人繪詞 二十卷

繪越前守之行

祠、後伏見院、後二條院、花園院

宸極、轉法輪公忠公、リ実量、

冷泉為秀、

開山淨阿上人傳 一卷

勅判アリ 知仁、後奈良院、

繪詞 三卷

在、之、祠、尊應准后

誓願寺

一休草一枚起禱文、跋

大雲院

後醍醐天皇御作、草入、名金林寺

後陽成院宸翰、大雲院、三子

一休草一枚起禱

壇王法林寺

美福門院中草、諸經集儀儀、卷

中興開山袋中上人草、琉球神道記

袋什弟子東暉、枕草子 五冊

了惠上人草尊問 名山院 通雅之使者 愚者記 三卷

南禪寺

夢想國師草、臨幸私記 一卷

天下南禪寺記 一卷

五山大明國師像贊 名山院市智衣 後柳原院宸翰

名山院、御腰輿、御徽厚

若王寺

大峰の秘書 大峰紀行之

銀閣寺

七賢杯

栂川、如鳥、書

平等院

扇之芝

鳳凰半鈎鐘

宇治橋新碑

惠心院

伏見院宸翰、惠心僧都法語一幅

持明院是時乃草、惠心院三字款

興聖寺

尊純親王草、興聖寶林禪寺款

中院通村乃草、當乃再興の記

道元禪師正筆如法語

橋寺

字以抄録

法隆寺

三經院亦於七種の寶物

(一) 釋迦如來、寶、掃衣

(二) 聖德太子真草、梵文綱經

(三) 神代の鈴 五大力明王ノ像アリテ
天竺ノモノカ

(四) 賢聖草 又初笑の草トモ

孔子・梁啓期・高山四皓・鬼のみ子

蘇秦張儀等ノ像ト銘アリ

(五) 御弓・箭・竹服

(六) 唐代琴 開元十二年五月五日 於院山和造

(七) 金山寺香炉 今大定十八年記了

天平勝寶八年聖武天皇御寄附

鐵古印 (一) 法隆寺印 (二) 鶴野倉印

石竹筒鞞鼓 并床

還城樂面 信氏、永仁四年七月七日

妹子請取、漆革箱 蓮葉ノ荷繪アリ 隋代ノモノ

西園院、寶物如法大師ノ草一切經卷

經部藏

善光寺如來御書

阿佐太子筆、上唐太子肖像

風爐、釣竿 トイフ、清風瑠璃之、園アリ 帝居博物館ニ運ブ

繪殿ノ繪 世尊者伊經トイフ 伊房ノナリ

繪、秦教真書 伊房ノナリ

後三條院ノ延久元年ニ畫ケルヲ、建武
西ノ年、唐唐ノ寺、延慶三年、元印六ノ
ホニ直リテ修補、今ノ畫共ニ真ノ筆意

ハ見ル物ナク

太子黄真御衣・膳妃御下帯・御鏡二面
古硯・味摩寺之福来位奥面数多

御茵

釣弁

聖白皇曼陀羅

舍利殿

辨也如素ノ舍利

姉子御由ノ法花經ハ卷一軸

周尺 有疑

太子製心ノ法花義疏 四卷

用明天皇宸翰法花經ハ卷一軸

目ノ葉花文

太子御竹子 銀製

壺鑑

尊徳親王草舎利縁起

金串

存尊鳥佛師心釋迦如身

葉師如素像

五重塔

釋尊ノ誕生・後法・涅槃・荼毗ノ
四像相ヲ云フノ土モテ鳥佛師ノ造

太子しんア

太子ア

石門ア

推古天皇宸翰ノ額。

今オカ石門カ必カ珍カ
白カ梅カト云フ云々

信貴山

毘沙門天祕佛カト云フ云々

立カ

信貴山縁起

四卷

由三卷ノ鳥羽尊嚴僧正ノ畫

初カ伊川カ歌カ

笙。大信貴カ・小信貴カノ二ツ

大信貴ハ信貴畑耐竹生々カ又カ生カト云フ
竹根ハ一ツトカ十七カ存カト云フ少カ珍カラ

行園作。風凰カノ詩カ録カ也

○山信貴は賴尊作

樂之面

鷲寺ト記せん

楠公ノ由月・大袖太刀旗鐵ノ鞍

太刀ノ銘依宗ト記し元モカレド疑有リ

最後状 者疑

當麻寺

本尊、今ハ新曼陀羅ニ建保

三年法印良賢法明源慶ノ御

父宮ニ行始

古曼陀羅ノ邊リニ拜マセ及カ

コトナリ

徳初縁起 三卷

徳ノ土名ニ及

初道達院中村ノ心ニテ後奈良

院ノ名義ヲ即ケ時ノ親王トシ

西宮公取信三小部ヲカ

後奈良院ノ名義ノ額

法然上人ノ行状

查土侍末

祠、伏見院、後伏見院、後二條院

代尊、古尊、定成

三、帝、衣、物、尊、圖、親、王

十種ノ寶物

(一) 何、尔、院、像

(二) 圖、老、大、师、衣、袋、袋

(三) 白、草、選、擇、集

(四) 持、蓮、花

(五) 大、师、遺、骨

(六) 肉、附、衣、袋、利

七、松、影、石

(八) 月、輪、燭、天、目

(九) 結、傳

(十) 佛、言、利

十界ノ屋敷

結、惠、心、佛、部

名、紙、伏、見、院、衣、物、有、疑

橘寺

本、尊、醒、德、太、子

後、心、子、佛、部、衣、物、弘、法、大、师、衣、袋、利

御、衣、袋、利、疑、可、り

山路一拾遺草一古蹟冠係

天竺一あんなら樹

新編 養羅果下り

聖之徳を子や日ありて後

古き大職冠一象

古き山蹟僧正草一古蹟冠

唱神徳

初集

菅原真蹟の後起

徳の初集の地一古蹟冠

古蹟冠のり一古蹟冠

古蹟冠のり一古蹟冠

鼠燈其五

古蹟冠一古蹟冠

真俗雜記 古蹟冠 新編 養羅果

古蹟冠のり一古蹟冠

古蹟冠のり一古蹟冠

石の水船

石権欽

三輪山

平等寺ニ古八祖ノ像アリ

赤土器 手扶てしよアリ

大塔宮ノ箭母衣 熊皮ノ付露

○大三輪寺

○若中村ニ若塚トシテあり

○此寺ニ古ノ始傳述ニ

日百祀長年命ノ所是出あり

○此村柳ノ村河ノ所アリ

志願寺トシテ 異名ノ過半アリ

寺ノ名ハ古ノ所ニ

産口ト云ふものハ

此ノ寺ニ

かまの口ニあり

なまのきり

般若寺

大塔之のゆりて大般若の櫃
弘法大匠の般若の寺とありて

○大安寺ののぼる物とあり

○法王ののぼる物とあり

○菅原相宗ののぼる物とあり

興福寺

泗濱・華原・嵯峨

○一乘院宮の傷送勢カ等等天長
十年後原朝長平子の乳女寺
葉師寺

六重塔 佛足石 近後平記

急養良等大般若六卷
後醍醐院深孝院多此心
大字代宸翰唯識御
光明皇后志法花經子結

縁起御四卷

地名物古洞寺

名物黒筒 拾芥河之

異制升 金伏段錢本

道小等積慈恩大師像

舍人親王等塔檨銘

唐招提寺

孝德天皇宸翰唐招提寺家

道心生一切経の如く下生る

縁縁起

初七を奉るる行忠

去備公志の跡大徳宗師經 天

芝の心志公六英経者部戒經

○金串とて鐵尾并り

西大寺

百舟豐出志疎金史の最勝王經

鐵ノ霞塔、中宮我仲の武

器を奉るのて踏てはとて

○集人の像よりし石。七平板

とて

○大志の竹おる

元典十刀

所行草字の各篇抄りて

天井し板

西本紀古

信少錄、太秦、唐、隋、古、續、了

高、雄、冰、獲、古

孝、福、之、皇、家、編、增、一、阿、合

為、博、品、之、三、卷

抄、之、尾、之、山、古

華、心、最、緣、紀、之、卷

給、上、代、光、任

多々如信正其蹟善給四卷
文學より其志上人の時属せり
名昭の十六の所讀
明惠志蹟後天の行程記
下空見海比如志草
高心支い航

王統

志川

延久

歌辭 金院先士健輝州の

中田少冬以行尾彫望園

後天抄

策考入唐日記

本

権詠 院名詠り
松尾園 院名詠り
實如集

部名の義孝之碑
時雨とりの筆

等持院

三ノ水十ノ代ノ像

龍安寺

伊川端之像

熱田神社

古日本紀十五卷

珍跡春殿門家

夜相

樂未面

慶丸 松切丸 熱河名信書

丹羽長安の書

水鏡後

山陰陽向
血不省
金澗友相
本支
一杯
流
既
係
後
專
寺
不
庶
朕
表
流
廟
主
係
後
專
寺
不
庶
朕
表
流
廟
主
係
後
專
寺

碑。

平面又刻

碣。

曲面又刻

摩崖碑。

天然の石壁に刻

總稱

の碑

別稱

の硯の八徳

温。寒を終て氷らざる硯の温い
 潤。水を貯へて乾らざる硯の潤し
 柔。墨を研つて泡をよむ硯の柔し
 嫩。墨を共なしてまろやかに硯の嫩し
 細。墨を停めて艶をほふる硯の細し
 臈。毫を護ると亦か細りしる硯の臈し
 潔。墨を起して滞りなすむ硯の潔し
 美。久しき故経て之れがらざる硯の美し

源語八本

(一) 行成本 今不傳。此者紫衣部ノ草履ヲ清書也

(二) 二條本 二條帥伊房ノ本

(三) 冷泉本 中納言朝隆ノ本

(四) 黃襪紙 堀河左大臣俊房ノ本
右大臣ノ筆蹟也

(五) 京極本 堀河左大臣俊房ノ本
早京極北政所
也。京極子工部卿右大臣

(六) 尚侍本 唐紙小双子。法性寺潤白本也

(七) 五條本 五條ノ三位俊成ノ本

(八) 青襪紙 系極中納言定家ノ本
○此紙河内守光行ノ本ヲ授名ニテ白ク取捨ニ家

本トセル世ニ所謂河内本トイフアリ

○山崎本在大経典ニ禪士一覽ヲ

キツトイテラレトヨレテキノ部ニ入レ

(大経典七卷五四八頁、三段)

○後系忠文節度使トシテ將門征伐下向

上畧都令其勢可家六の將勢、二月二日に都ヲ立
テ關ノ東ニ向シケル。暹ノの志すめろ、而シテ眺
望いませ、是則め、山の色少、則少きりし、浪
の音、所、孫、多き、ナ、名、山、の、湖、如
波、子、長、出、よ、多、む、後、り、お、み、又、陰、中、傍、山、
去、の、霧、く、わ、移、す、ら、ん、疎、多、の、長、橋、お
後、り、ら、ら、子、よ、く、へ、く、よ、と、山、若、ち、あ、る、金、天
白、草、五、十、年、の、冨、士、の、ふ、お、と、終、せ、よ、て、彼、も、涌
出、を、し、と、か、わ、つ、旅、の、渡、り、皆、人、の、ち、を、懸、數、の

のちぬりたる年々秋をばして菊のこを白
し名を達ふ菊河の流れよゆひを弄し時句
をば高部より序都の上さこの成りて事
もし人々毎こみなるものなるありて誠して
手紙川原をさし初見れば子承の衣織り
習る志豆棧山より其の果て唯徳性さぐり
氣色より後懐して二月十五日駿河國
富士の井巻路より著きし給ふ。此より暫く
區ぬあり。後子の後方を保子とす。よしと
浮るふらるるを前より當ては見えが聞え陣

をばし抑也の國の秋をばし一の秋を
よそ指し海の色く甚くやしは瞬とを裂こ
左の山勢力連り從軍一杉の存と冷しく釣
す。よそ女との終おははる借さる。僕火の香
夫の回さるる光の國の空のまをよしとす
此の國の國のこころをばし軍監はるる
後後不ふ教
僕毎火の香冷焼は 駿路終る
秋過山

と七七二句を綴りしあは、折しめらう優よ
ゆえらう、皆人興を添へうたし

神曰、後舟大教の句、庚の持荷
ゆゑの祿なり、そふを綴りしは
馬なり、頭祿せしむじもふし

右左平死後廿五年下り、冬、似々六矢
照マラ死ス

○前々平死(掃塚著)深き業が甘からば

も物徳ノ事ノ保

延長十し手左大臣原光公業逝しむり、

然融大長ノ次ニ一上ニオハシツオ才業優長ニ

モマシマス上ウ公程私無ク業へ玉へバ後世ニ及

ラ本都ト云シ才才ノ女世物居ヲ依リケヒ見

ヲ賦トシ様ノノテトヲ書連ネタリ殊更そを

神ノ巻次ニ此又九年ノ時高貴人依リテわし奉

ルトテテ家ノ家ニ志不業ニ光アレバトテ其ト種

シ侍リシヨリ則チ諱ヲ光ト号シシハ、いふまじマテ

不被改ト世以思と定メ侍ルニ固史實録ニ免ト

ア子家飛ト云シを刊ト云相似名ラムニテ縁ト云ハ歎
其此人ノコトニアラス大概ハ当人ノ儲人ノ中ニ要モ
左大臣長子ノ的以馬行跡ヨリ彼お成ラ書キ入ル
相対色バ准此又ハ老ノ子ヲ誓ウ事ナリ借リ
ノミナルベシ依モモほお成ハ何故ニモ草紙
ゾトモ本内ヲ成ヌルニ表ハ上東門院ノ侍慰
ノ為ニ擬シ裏ニ世ノ盛衰ヲ云スヤウニ見セ
ナガラ實ハ女ノ性悪ク馬名成ニテ橋慢奴
止マズモ執深キ瘡嫉妬此ハ是等ノコトヲ
千世ノ女殊ニ我ヨリシテ貴ノ人ニサシアテ我
ノ難キコト古人ノイリテモ有ナラヒナリ去則カヤツ
ノ草紙ニ書キテコトヲ佩ズル由ニテ人ノ久ラヨ

ノ化也也サレバノ愚心人ハ唯ヨリコトニ見ケシ
テ亦モ心ガ成ニテ彼ノ所會経ニ後ノ所
ア馬ノ命ヲ殺ケタリ予極上ノ名ニト云ハ難
景ヲアテテ又ノ次ヲモ躍リ起エ付ん現ヤ
道ヲ行クニヤ又ハ月夜ノ上馬ト云ハ七
夜ノ皮モニ着んラハテ勿送致ノ數ニアリ
次ニ中分ノコト成テハ難ノ痛ニ肉ニをラ
サハ是ヲカガブノ思ヒナシ最トノ婦ト云ハテ
ミ昔然ニ徹シ付レトモ未タ馳走ニ心ナシ
モ如クテ世後ニモ心ヲ左様ニ付ル人ナリ
通上知ノ人ノ中ニ自然ト思ヒ入ル族モテ

願ふテ心ヲ哀ニシ也ケリトモ思ヘトモ己ガ行跡ハ正ニカ
ラズニ恥テ人ニ得ホサズ中城ノ怨人ハ我が好
ムクニリテ或ハ辱モ物尸ハ事ニ委シ傳ヒテ
スト又ハ歌ノヨキ佐トモ思ハカリテ
執シテ停ニ凡ク花多ノ事ニシテ人ノ心
多シテ到クニ武部ガ心ニ世ノ抑老信也
ノ刃ニおたりタル女數多アルニヨキ心操ナル人トテハ
此ノ上一人シテ侍ハキ失アリテ大人ノ女ニ
ニヨキニ此ノ後ナル物故武部モ是ヨリ此ノ事
ヲ言フハキニナリテ是モ世ニ云ヒナラハス
ハ所ノ事ノ巻文ヨリ傳テコソ此ノ事痛シ
内ニ頭ニモ理ハ左モ中ヨシ共ニ世ノ女ノ事ナ

ニ此等ヲ也ケル一部ノ事ニ似レタル武部ガ情
ニシケルモ直也。供テ紫ノ上ノ如シテヨシト
定ムカトイハル夜ニ何カスル女ハ高直
ナニアラスシテ萬知ニシテシカモ猥ナズ己ガ
才覺利根ヲ以テ夫ヲ教戒スルモアラスズ実色
化粧ヲふトシテ夫ヲ是ニ志スモアラスズヨリ
嫉妬ノ心ハ有ラモ色ニ耽ス一モナリ増テ何
ハ恥シ迷フベシ此モアラスズ又ハ能ク忍ブス
ラ抑テ礼トシテ一生此上ヲ捨テタマフ事
ナカリシテ其時ノ幸不也カタクモ
ナリシヤ。次ニ夫ノ事ヲ云フ。是ニ関テ昨ノ礼ニ

背キ嬉しんやうに見え故先ハ好色人ナリト傳
及ノ輩ハ是ヲ嘲リ此物語ヲ手毛取ルシトス是
又信見ノ至リナリ事部ガ心合テ以テ源ヤノ好
色ヲ戒ルニアラズ其好色タル人ニ對シテ婦ノ
礼法ヲ乱ル女ヲ誡ルト見ル却テ此書末代ノ
不易ノ宝鑑ナリ。サレバ異朝ニ或婦人常姑夫ノ
前ニテ飯ヲ給シケル折筈ニ玄田々大ノ尊リテ其
魚骨ヲ待テ下ニケル時一咄此リシナク其夫忽チ其
妻ニ暇ヲ出ス隣家ノ人ニ隣ヒテカバカリノ事ニ夫
婦ノ中ヲ廻ケルコト布喜高ナケレ若又外ニ亦
ハアリテ世ニ傳ハキヤナク及竹筒抄ノ群別ニ

玉ヲカトミ入テ甚ク多敷ラ向ツガ有来此女他
利ナシテ上其コヨリ事ヲ是ヲ教ツ一便世
ケレトモムセシ礼祀ニ尊キノ前ニ狗ヲ齧ツテト
アヒモラカ及バサレ一也トテ永クそまアテ歸シテ
リノ凡ソ婦人タ人ツ所ル礼共守ルキニ何ゾヤ
ラ條ノ事見ル鬼ト成リウ始メヨリ事定
マリ見養ノ上ニお怪病ス何事ゾ井筒ノ女
ガ凡ソ沖津白波立甲山おまきやのるか指
城ユコト後ニコソ終ノ妻夫ニ成リケレセテ
澤ノ葦ノ灰ヲ打掃ケ或ハ指ヲ略切りテト傳

高水ノ交りしるこきぬ多うたの戒がザウこヤ能
ケザラヤ。まラビのーま部ノあら心こ掛ケ
テヨリ心たノ心モ骨ヲ折リた甲受んハケレ只
徒ラ此物角ラ優格民衆ノ書ト思ヒ世々
宥懐ノ如ト歎死ハ馬とトヤ定ク甲生ラ
石山ノ初音ノ十ハ中カラ何ネドモ式部ガ
才覚一ツミテ出スマじキモノニアラズ己ガ度
セヨキマ、ニ式部ガ自カニ報シト思ハス井ノ中ノ
性ガ夫ノ後キラ冠ト歌ニたつ三ツカカラ見
心モノ印モ徒ニタテ、そ死トモハらんマ左
今ヤ出ヤラヨ別チソレコフ火定ノ所

○今ノ様職人尽歌合

(文政八年七月刊
北屋信真、筆画入)

七ツ歌、改定判狂歌)

挿繪初書

真顔、部上巻

萬歳。女方ウク十年たアツヒ

鳥おひ。せぢやうやまんぢやう

多おむひがあらあ

花。此屋の野わきたそいれ

さうらうたて

古筆賞。いこくやぶのぬ歩ノ歌肉

草履造。あまうらひはぬの物のしら
のちもまゝなるあまうらひのしら
ふるりしんてい。はがらうも海つらら
むよりいせがらの布ふしやあらわ
獅子舞。さしよすわよくこそはさ
踐炮師。萩野流いぶしーまがむし
櫛梳。鶴の岡なる尾公ぬけ造お
つせとみほせらる
井戸堀。こらうらうらぬ葉れらる
ま

飴賣。あまうらひはぬの物のしら
がらの腹葉うらま
水賣。ひのめさし、植れ葉ふ井の
らみまうらひやうらま
更ふら。こらわこなるいぶあんなら
麻ふらぬやうらま
志あり中ス
越後獅子。ひのめさし山のちうら
えんがやうらまがアうらま
陶物師。此は志るびのらうらま

やうしてあつらへたものを焼くやいふやうに
びんをこするやうに

梅竹賣。竹とちぐさちとて出さぬ

みぐり

魚うり。飛魚もいづれやく飛中ば

植木賣。何よりお中寄まで不ぞの縁

りよ事小油のかりだおんとの縁お

又のいふことさ。ちふい十二日るわい三谷の

うさくおあ

園庭うり。さうはちえなうちえ

めむさおまおの似せおまおまお

笠ぬい。今か、今年、笠のよお

ゆかりさぬいさうゆのまお

壁涂上。何れお不賣さしおいざ

ゆさみさ

放鳥賣。もれおあさしお

おむらにいななる鞍ふさせ

どらこ

笛賣。母さうこひあよる

何れもむり

仕立物作。は山袖さしぬい根言

七、たぎぎもわらもしき
面打。初午祭りのあたりにありさ
ま

ある。つらぎの細エリ
船目造。船の目どぐあきし
せられら

いとあつごのまし
船あしぢら。あけらるる名よのたぐ

飯盛之部下巻

猿曳。ついでとらけ見てさびざん
かうらとせ。ふのひしきとせとらけ

行燈燭基おしなぐてあまもりては

お蕎麦。風きてとほやあたら鼻水
のうがなて甲の中へ入りぬてなれ

さうさ。寛くうまあるふし
卯子。とらけのひらあひるのうま

三弦師。牡丹子。印繪させまのあ
なるの三升とひいさなすうていさ

鑄物師。父とともがくみこのつら
てはやくてはくしぬすし
ゆあてくさし

奉公人口入。おのゝり人ふ出さぬを
とわさしのかきとてむいひぬの
とぞくらのひやうとぬを
物當。ぬちのくくわう駒
とちやとさぶとつる後れ紋
みよぬせてら
目のぬらと。目鏡
虫の目よお
くもあさわ
看板書。大江戸の中
ぬらと

ありきく物
わくくつ
海苔漬。紙
とくさ
紙屑買。紙の屑
軽業。野
車引。車の
すは

作さしむ

鍋のつるこ。鍋のさりとらうら

かきしんのかきとみんのかき

張翁造。おまじのり山法師いり

まきぬあのかきつゝかまにあす

まのせあ

さるまはし。出西を著くすの返魂丹

中田のこの前とすあさ

太鼓うき。うばとひきあはる音

磯らばはまあな、さか

おく福引。大さうのりねの餅

おきうらまひのりてらう我あ

寂滅ま

きおあ。きの市あ

あまのりて

硝子吹。瓶子風鈴か

さるま

つらばあ。あまひつらあ

以上西者を比較するより其親
ハ十位ありバシマシハ四十
五位あり

義経記地名

大和尾崎の郡

（大和）

（大和）

山崎

（大和）

山崎

（大和）

山崎

（大和）

山崎

山崎

山崎と奥州とのさあひなりせき

山崎と奥州とのさあひなりせき

山崎と奥州とのさあひなりせき

下野の急いも

よりや川の城尉川

あつちの山河津加志山

あつちの山借山作心伊達郡とあり

ゆきかしの原 行方原 岩代

あきこの北沼

すかしの河の端七田町

六保野川

志のうごさる 隆前田方坂

いさむさ 伊達の関

むりこの郡 最上坂

かうの北中雄勝坂

せん北行金沢くう金沢

白き山 羽後白木山

いさむさの路ぐ

あづきの郡 隆中和田

越後国金津がた佐野いしかなづちく山

あつちの中山

大津の浦

あつちの関

あつてく 四 十 廿 う じ

すりまらり

あしがら

白川の関

松坂 下栗田口と日の関の間

宮のまろ

あつての関

大津の関

せいのめ

かみのめ

巻 あつてのめ

あつては・まら井

あつては・まら井

こやすのめ

らせ川 杭瀬川

すのめ川 墨俣川

あつてのめ

あつてのめ あつてのめ

なつて

まのめ八

まのめ八 まのめ八

浅香山

佐夫のり

くけ張後名取郡
西遷二本の松

あふくぬ川

みゆ本路の系

清くしめの系

ふかきものしむら

まかきもの時

かひ川をゆ

まね姉上の松

うりもら

栗原寺

あつらよの松

ゆらさよのちの松

三迫川を隔ちて其下

卷三

五條の天井

一條の向 鬼一は眼修お

山一な

熊野如言の別所舟屋の父のまの

津のふかき

新井のふかき

あやうのふかき

武蔵の^{武蔵}郡

ふりも口

川口

武蔵の^{武蔵}郡

さきみのひ

伊豆の玉ぶ

するがの玉せん

うきしまら

握京あずな

ころころえ

やまころ

巻四

武蔵の郡

武蔵の郡

武蔵の郡

武蔵の郡

大

信

武蔵の郡

のり

あざらのせと

けりまのまのまのま
あまのまのまのま
まのまのまのま
まのまのまのま
まのまのまのま

大和玉守のまのまのま

吉野

かみのまのま

一二のまのま

三回の時

まのまのまのま
まのまのまのま

まのまのまのま

まのまのまのま

まのまのまのま

まのまのまのま

まのまのまのま

まのまのまのま

くうきせいのーや

しらのみね

ゆづりちのーや

さくさくざんた (産中谷)

さくさく谷 (きんぎょ谷)

吉野川の水と ちり糸の湖

おのーや (おのーや谷)

一 條 今川

赤 幅

を つらえ

だ いじ

山 科

巻 四 保 屋 町

この玉川しり

やしゆををいよんてん

な

うちあのもゆーのぢーちりな

いぶきのさけ

由井のともゆ

いなりせ川

箱根川、古名水無瀬川

あさごら

ゆいのあしうら

相摸をよめいこうら

ゆいのこー ことめよんまゆ いる

がしもの

天龍寺のふもと
せんりょうじトカラウ

水陸道

越前

はるがの津

敷原

桑比のやしろ

桑比神社

越前大野郡、白山、南口

ついでんじ
かしの玉もる山 下白山

越中の玉よまほころこ

出ぬ玉もる山 羽黒

急らこの玉な旅えの津 直江津

こ保了る由日

大津のうら

せまぎら 開寺

塩津・うらづ 海津

山田・やぎせ 桑津・松毛

やぶさ 野の松

ちくぶ しほ 竹生島

西と江

かこりのく 堅田

まのく 真野の江

いま 近江・今津

あらちの山 愛發

越前 こぶ府 松生

のう山 越前能美越

三の口 道の口

ひうち 越前

へいせ 平泉寺

くま 越前

ま 加賀 須河社

かな 金津 加賀ニアリ、

河

越前能生アリ

志のせら 篠原

何れかのあり 安宅

ありありのむら 根上り松

志の山のおんげん

也の玉子のこし 腰

大のこし 越前、加賀、越中

あまのこし 粟ヶ崎

きまのこし 竹松

くろのこし 五ヶ所

こい 五ヶ所

六 五ヶ所

あ 五ヶ所

い 五ヶ所

あ 五ヶ所

い 五ヶ所

あ 五ヶ所

あ 五ヶ所

あ 五ヶ所

あ 五ヶ所

あ 五ヶ所

大野、御三土、野添

越前、加賀、越中

粟ヶ崎

能生、白山社、アリ

國府、五ヶ所の寺

なをえのほ 直江津
 がな山 米山
 くりやもあ 川羽濱
 うりま 勝包
 ちりさ記 権谷崎
 ちりさ記 寺泊
 くりさ記 くがみ山 52
 のつり 浪垂
 やんぢぢ 番車
 せなつこ 浪波
 あつりうら

いまふね 岩船
 すさしと見ち 須戸鶴江崎
 いまむかき記 岩が崎 52
 おりむつやな 馬が崎
 おんどめの中ね
 ちりさ記
 大あし
 ちりさ記
 ちりさ記
 ちりさ記

あいらと

合海

かこのうらり

加美郡

いなのせき

有耶堂部の関

いんばのうらり

いんばのうらり

ちこのあな

おら

りあるよら

吉田が不知上記

あめら

むらり

むらり

└

あいらちの関

あいらちの関

せいせいの関

あいらちの関

村田崎の関

あいらちの関

あいらちの関

あいらちの関

あいらちの関

あいらちの関

あいらちの関

あいらちの関

あいらちの関

あいらちの関

あいらちの関

あいらちの関

あいらちの関

あいらちの関

穀の足付を減えぬは

もるその、観音

かき山

角田山

がら山

かく山

(あき山)

かき山

あき山

のこのまきかみさ記

ゆきまらむら

まき山

かき山

あき山

かき山

あき山

かき山

あき山

あき山

かき山

あき山

かき山

あき山

せんりあけせし
ぬんしゆのせき
出おの玉ましく海穴原海ナリ
あおとら山
しんまの邪三せぬましき
さざら
大いついぬま
ちりんじ
いものくらうら
せぬ海

あけな山
ぐくえ
あふのこし
つば山
あやのきり
本合海に古口村ノ間ニ
四峠ト云フ所
ふねか増後よ
白糸の流
あろひの明流・さぎよの田米
いぬあひのせ
いんたうり作しみの杉
あむのち明あ

合海合貝

あいの河

あいの河

山

嶺

最上郡

舟形山

長沢ノ北

あいの河

海見ノ湯

泉

山ノ東

あいの河

二迫川ノ北ニ縁

八幡ノ東

半里

あいの河

あいの河

あいの河

あいの河

あいの河

あいの河

あいの河

あいの河

あいの河

あいの河

あいの河

あいの河

あいの河

あいの河

あいの河

あいの河

あいの河

あいの河

あいの河

あいの河

あいの河

あいの河

あいの河

あいの河

あいの河

あいの河

あいの河

あいの河

あいの河

あいの河

あいの河

あいの河

あいの河

あいの河

あいの河

あいの河

あいの河

卷

高館

片言半句為春

義經記曾我物語雜詞考

ア

あいのいけ

七卷 成合池 歟

あふのたのまろ =

あけなほ山

七、世相ニナシ

あふりのね

二、……まのまの路……

栗田口十せんじ

一、十禪寺歟、十禪師歟

あつちのあつち

五、あつちのすさ……は急ぎきた

あをかけて

月の輪(態)を……と……

いをりて

第二人の心知……は君并父子の……おきで

井

いかりにーしるる 七、葛大口むらうふをさし、

いくまゝたる 八、此ニミナリ、わたりを、

いさむ際 一、伊奈の関ト云う段アリ

いーかりつる 二、

いさむのま 三、

いさなり 四、外は、

い二のはや 五、地名、

いさし 六、

いせん 七、

いの目 八、

いさむ 九、

いさむ 十、

いさむ 十一、

いさむ 十二、

いさむ 十三、

いさむ 十四、

いさむ 十五、

いさむ 十六、

いさむ 十七、

いさむ 十八、

ウ エ エ オ ヲ

七、葛大口むらうふをさし、

八、此ニミナリ、わたりを、

一、伊奈の関ト云う段アリ

二、

三、

四、外は、

五、地名、

六、

七、

八、

九、

十、

十一、

十二、

十三、

十四、

十五、

十六、

十七、

十八、

こりや口

三、郡内國尾三の郡、こりや。こりや街ニテ河口に在リ

こく

有ハ、かのり。こく。志戸と

こげの入道

六、忠信ノ情婦カヤ女ノ父。小柴ニテモ凡カ

ごしんき

七、大舎割喜子の市しんき。獲身

こしん

有土、こしんやのりやせしういし。胡人

ごせん

有五、ごせんとりふち河。足川歟

ごもりば

六、長刀、こりやの洞。小友双歟

こふりのかほごせ

有こ

ごんづ

七、おちんのほごま、こりやとして。金剛寺を破ニシモ

サ せじあし

有、こりやが要む、こりやは千載も絶えず

さくら谷

五、吉野山ノ地名、

さけみ

三、古橋トアラタリ

さざし

有一、佐原の十郎歟

三四のさげ

五、吉野山の地名

三は

一、こりやに十一代以来、淡海の後胤

三の口

七、此路道より道ノ口、即チミチノクチヲ道ノ口ナ

しいのみね

五、吉野山ノ地名 推の峰ナレシ

あつら

一、障前四方阪ナレシ

シ

○東京飛
 六時四十分—午後三時七十分
 四時四十分
 名古屋飛
 三時四十分
 鳥羽若
 五、五七
 計六、三二

○鳥羽若
 六時十八分・七時・七時四十分・七時五十分・八時三十分
 八時三十分・九時・九時三十分・十時三十分・十時四十分・十時五十分
 又鳥羽若
 七時四十分・七時五十分・八時三十分
 十時三十分・十時四十分・十時五十分

○相可口 | 賢島
 尾籠智間 一月二十七號 二、四、三
 五時・七時・七時十五分・九時三十分・十時五十分・午後一時五十分
 七時二十分・九時四十分・十時五十分・午後三時
 尾籠若

○新宮 湖 串本間 六十八分
 五時十五分・六時三十分・七時三十分・八時十五分・八時五十分
 九時十五分・十時三十分
 那智若 九時十五分・十時三十分・十時四十分

○周知見 **和歌山** 間 一三〇、二科 一四九、十位 **四、七〇**

若古時十五分・七時三十分・九時十五分・十時五十分
若十時十分・十時三十分・十時五十分・十一時五十分

白濱若古時五十分・九時十五分・十時五十分
○白濱若古時五十分 和歌若古時五分

和歌山 一 **和河** 三六 和河一吉野山一五六
○和歌山一王子 一、四。 吉野山一吉野口一五〇

○王子一京都 一、六三 吉野口一吉野山 六二
計一三、九四 **大津上市** 八五

○京都一城崎 二、四〇 上市一彦改 五六
城崎一執費 二、八〇 彦改一宇治 六一

執費一金津 一、二一 金津一三國 往後 三二
金津一金沢 七、一

○片山津、大聖寺、下栗津、向、歌
動、日、八、八

金沢一七尾 一〇、三 宇治一醍醐 一三十三百七

七尾一富山 一、四、五 京都一橋立 一、八、七

富山一上野 三、五〇 二、八、一、二、二、八、五、八
計一三、三二 橋立一吉野山 七、七、三
總計 約 三〇、〇〇 一、三〇、七三

吉野詣記。三條西公條卿 天文二十二年二月廿三日都を出づ。

鳥羽一岩田の小野一天神の森一薪一ツツみ川一柞けその杜

奈良坂一般若寺の文殊堂

廿四日。春日の社一高たか園のり一羽は買かの山下の各各義義寺寺、十轉院

興福寺一東大寺大佛殿一八幡宮一念佛堂の舍利

二月堂一知通院

廿五日。佐保姫の社一眉間寺(糸櫻盛)

不退寺葦平白筆の像あり。法華寺一海龍王寺一

超勝寺一西大寺一菅原の伏見

招提寺一華師寺一大安寺一元興寺一大家院

廿六日。在原寺一柿本寺(人丸像)一筒筒甘甘筒筒の井

石上ふる路(布ぬの社)一内山一長岳寺(釜口と銘あり)

廿七日。

廿八日。柳本大神一あなこ川一橋原大御輪寺みゆり三輪明神

三輪の山一さのく渡り一つば市一泊瀬一やほの岡
二本の杉一多部寄坊
廿九日。ぬつき一往來の函一橋寺一佛頂山(楊堂ん)

飛鳥川一安部の文殊堂一耳世一山一蘇我川
いけれ野一高田初瀬寺
三十日。曲川

三月一日。芝路の花本あや登んあやさるあやしあや高野山あや向ふ
二日。戸たて山一まつち峠一桜井の水一宮路山あや坂一

石部坂
三日。高野山あやかぬ川一清水川

四日。高天寺あや一葛城の峯金剛山一法花菩薩

後行者一葛城の沖一岩橋

五日。吉路一六田の逢(柳あり)園屋花は散りて所に残
り。こもり勝手の両社。葛城の門
つまはりありあやを寄りて花の本とて教も知れず

還來寶塚

六日。吉路を出づ一六田川一高田泊瀬寺、極楽寺

七日。休

八日。當麻寺、瑞穂壇一ゆき殿一あゝの大野

片岡一清水一明王院

九日。あゝの原一あゝの原一葦原寺一春日大明神
飛鳥山一法隆寺(梵網經)新田一なつらの宮
結末一龍田川一岩瀬一山合山

十日。信濃山一橋生院一鳥羽河
 河内玉八尾本の金剛蓮華寺をこしと行ききく
 十一日。住者一八尾(寺の名所)天王寺
 能井の水一龍虎寺の庭
 十二日。水世深 山崎
 十三日。御新堂一雲山八幡
 十四日。水世深より久我を過る。はつかりの妻
 都出でて二十日になりたり

◎昭和十二年三月十六日興津行記

朝四時三十分を以て解り乗車、
 五時廿分を東京驛より改り別なる乗替、
 浮島山ヶ原ノ原驛下車、驛の北裏の川
 りて夕たこを御む一向辰ず、
 一本杉より北へ進み川を越 鮎子残む一向
 あらうなりし。古原住の人の江木標よ
 道ふ氏の御めりて 山子とりよ小魚と
 御む、御ハホシじやう(田の中の小魚)といふ小魚

を氏より世しく釣る釣は瓶のふま
多ナゴ等々三つばけのりむ万 四ヶ尾
者、そつ創に回すの 鮎二尾交る
陰木氏の落ると鮎まご時期まぐ四月
まぐ大乗のちりりし
三つ河ヶく釣るらあ徒家ま陰
川鮎の向ふ、途申去、原の途送、
の貨物白魚まの乗せ、陰川鮎
若、餘まご三ヶくげり、行、く、ん、興

津まき、中宿ルの当地の文子、
三ヶく 細いお初名、旅装して、保
宗、途申、興、傳の、不、却、為、年、活、下
り、そ、清、包、ち、ま、お、路、く、往、ま、途、申
清、山、落、川、の、バ、ス、ま、乗、る、(貨、十、ヶ、)
は、止、場、より、院、ま、ま、そ、原、の、お、村、者、
(お、貨、十、ヶ、)ま、保、の、物、是、下、り、
ま、川、より、三、徳、お、下、れ、ま、路、新、家

よりおれの取こもあそむるの
三橋おれあまより久能山川のバス
のついでにやまをいふ
かしの細きるる久能山を山
清水の清く又感謝、物と
あそぶを多しとて山、就
はたかたつは只砂と
花毒さるるお、花毒さるるの
花毒さるるお、花毒さるるの

の感得、ふふ山を
ジーンやふふ氣、
舟よのついでに、
示統、
又清水のバス、
清り、
バス、
バス、
バス、

河邊物系、列在中

野言多、廣名即

知波田村令會長

神英 田力

氏より。河邊節又話より

今世御名をとりて期して川

子に記してしる

二俣西條、尾左驛

磯島八世

濱名郡新井町
(伊原野) 尾

